

# カレン人とその言語

加藤昌彦

## ●カレン新年の祭り

「民族のるつぼ」と言われるほどにビルマには民族の数が多い。それぞれの民族には固有の言語がある。当然のことながら、文法体系もそれぞれに異なっていて、例えば「ご飯を食べる」はビルマ語では日本語と同じ「ご飯十食べる」の順になるが、これがカレン語などでは「食べる+ご飯」の順になる。

民族の多いビルマは、言つてみれば言語の宝庫である。ここでは、ビルマ人、シャン人に次いで人口が多いとされるカレン人の場合を例にとり、その言語を取り巻く状況を紹介してみようと思う。

ビルマ暦の一〇月、ピヤード一月の一日はカレン新年と定められ、ビルマの祝日になっている。太陽暦では一月の末から二月の初め頃にあたる。ヤンゴンでは、この日をはさんで数日間、新年を祝うカレンの祭りが盛大

に開催される。場所はインセイン地区にあるアーレイ・ガーディンというパゴダの境内である。境内に設けられた舞台の奥には三種類のカレン文字で「カレン新年」と書かれている。この舞台の上で、伝統舞踊の競演会、カレン式ボクシングの披露、伝統衣装のファッショニショー、コンサート、カレン語による演説会、カレン民族旗の掲揚式典など、さまざまな催しがおこなわれる。この祭りの最大の目的は、日常生活で忘れがちなカレン民族としての自覚を喚起することと、カレンの伝統を絶やさず後世に語り継いでいくことにある。ところが、このような目的を掲げた年一回の祭典で、進行役の話す言葉は主にビルマ語であり、カレン語はときどき思い出したように使われるに過ぎない。なぜだろうか。

その主な理由には二つある。一つは、一口でカレン語といつても実際はカレン民族の言語は一種類ではないことを示す。二つ目は、カレン語はカレン民族の言語であることを示す。

と。もう一つは、特に若い世代に、カレン語が話せない者が多くなっているということである。

## ●カレン系民族の広がり

ビルマには一〇をはるかに超えるカレン系民族が住んでいる。ただし「カレン系民族」がすべて「カレン」と呼ばれているわけではない。カレン系民族というのは、親戚筋にあたる民族をひつくるめた呼び方であって、現在「カレン」と呼ばれている民族の範囲はこれよりもずっと狭い。

ビルマでカレン（ビルマ語の発音は「カイン」）といえば、スゴー・カレンとポー・カレンという二大グループを指すのが普通であり、カヤー州に住むカヤー（赤カレン）、シャン州に多く独特的の黒い民族衣装で知られるバオ、金属の首輪をはめて首を長くする習慣で有名なパダウンなど他のカレン系民族は含まれないことが多い。一九九三年のビルマ政府の人口推計によれば、「カレン人」の人口は約二八六万人である。

スゴー・カレンもポー・カレンも下ビルマ一帯からタイ西部に至る広い地域に居住している。居住地域には平地もあれば山岳地帯もある。カレンといえば即ち山地民

族であるかのように思われがちだが、ことビルマのカレン人に関する限り、そのような考え方はあるまらない。イラワディ川のデルタ地帯に居住するカレン人の総人口は一〇〇万を超える。反政府武力闘争においても、デルタの出身者が果たしてきた役割は重要な意味を持つ。

また、タイ国境の山岳地帯に近いカレン州からテナセリム（タニンダーアイ）管区にかけての地域も、カレン人の分布は海岸近くにまで延びているため、むしろ平地居住者のほうが多いかもしれない。

## ●一つではない「カレン語」

一般的に、カレン人自身は、カレン語にスゴー・カレン語、東部ポー・カレン語、西部ポー・カレン語の三種類があると考えていることが多いようである。実際、相互理解の程度からいっても、このように分けることには妥当性がある。

会話をするとしよう。最初は借用語をはじめとするさまざまなものに戸惑うかもしれない。しかし、比較的短期間のうちに意志疎通ができるようになるはずである。

一方、ポー・カレン語の場合にはこうはいかない。特にイラワディ・デルタの方言（西部ポー・カレン語）とシッタウン川以東の方言（東部ポー・カレン語）の違いは大きく、ほとんど通じないくらいだといつてもよい。その原因として、発音が大きく異なることや、同源の語彙でも意味が異なる場合が多いことなどが挙げられる。例えば、西部ポー・カレン語で低く平らに「サイン」と発音する「走る」という意味だが、これに対応する東部ポー・カレン語は高く平らに「チャイン」と発音され、意味は「歩く」である。

私は、東部ポー・カレンと西部ポー・カレンの友人に、それぞれの方言で書かれた文章を朗読してもらい、互いにどの程度理解できるか試してみたが、よほど簡単な内容の部分を除いてほとんどわからなかつた。東西のポー・カレン語の違いを見る限り、カレン人がデルタに入つたのは、一部で言われているようなイギリスの植民地化以降ではなく、それよりずっと以前だと考えるのが自然である。

えることがよくあつた。あるスゴー・カレンの青年が「カレンの発展にとって言葉の違いは団結の障壁となる大きな問題だ」と言つていたのが印象に残つてゐる。

### ● カレン語の文字

カレン語の文字には、キリスト教スゴー・カレン文字、仏教スゴー・カレン文字、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字、レーヶー教ポー・カレン文字その他がある。このうち、広範囲に普及しているのは、キリスト教スゴー・カレン文字、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字の三つである。カレン新年の祭りで舞台奥に書いてあつたのもこの三種類の文字である。

キリスト教スゴー・カレン文字は、一九世紀の前半にアメリカ人のバプティスト派宣教師ウェイドによつてビルマ文字とともに考案された。カレン文字の中で最も普及していく出版物も多いのがこの文字である。スゴー・カレンには比較的キリスト教徒が多く、インテリもこの中から輩出していくたといふ事実が、この文字の普及の原動力となつたと思われる。現在、ヤンゴンのキリスト教徒スゴー・カレンが中心になつて、この文字で印刷し

然である。

ところで、スゴー・カレン語とポー・カレン語がどちらに違つてゐるかというと、ごく一般的な感覚で言えば「外国语」といつていいくらいには違つてゐる。よく「ポー・カレンの人々は皆スゴー・カレン語が理解できる」という話を耳にすることがある。確かに、スゴー・カレン語の発音の体系はポー・カレン語の発音の体系よりも単純なために、ポー・カレン語ができればスゴー・カレン語が比較的習得しやすいというのでは事実である。しかし、「皆理解できる」というのは誇張のしすぎである。實際、私はデルタ出身のポー・カレンの友人にスゴー・カレン語のビデオ劇を見せたことがあるが、この友人はほとんど理解できなかつた。ただし文法は非常によく似ているため、学習すれば、どちらがどちらの言語を学ぶ場合にも習得は早い。

結局、スゴー・カレンとポー・カレンが会話するときや東西のポー・カレン同士が会話するときには、多くの場合ビルマ語に頼るしかない。彼らが同じカレンであることに「仲間意識」を感じつゝも、カレン語で意志疎通ができないために「よそ者意識」を感じてゐるよう見

た雑誌を不定期に出版している。

キリスト教ポー・カレン文字は、やはりアメリカ人のバプティスト派宣教師ブレイトンによつて一九世紀のところに考案されたもので、キリスト教スゴー・カレン文字に範をとつてゐる。この文字は元来東部ポー・カレン語の発音に基づいて考案された。ところが、圧倒的に仏教徒の多かつた東部地域のポー・カレンたちには好まれず、逆にその後キリスト教信者が増えたデルタ地帯のポー・カレンによつて受け入れられることになつた。西部ポー・カレン語を書き表すには多少無理があるのだが、今では「西部ポー・カレン文字」と見なされることも多い。筆者がパテイン近郊のデルタの田舎町チヨンビヨーを訪れたとき、町の入口にはこの文字で「法律の枠の中で行動せよ」という政府のスローガンが大書されていた。仏教ポー・カレン文字はモン文字に範をとつたもので、伝説上は現存するカレン文字の中で最も古いとされる。正確な起源は明らかになつてないが、古い記録としては、一九世紀なれば書かれた仏教関係の文書が、カレン州の州都パアン近郊のいくつかの僧院で発見されてい

人はカレン語の読み書きを知らないというような記述が見られることがあるが、普及運動の高まりもあって、この文字はカレン州の仏教徒ボー・カレンの間にかなり普及している。パンとその周辺地域には仏教徒のボー・カレンが多く、当地の政府のスローガンはみなこの文字で書かれている。

なお、もう一つボー・カレン文字をつくったレー・ケイ教は弥勒菩薩を信仰の対象とするもので、ボー・カレンの一部が信仰している。パン郊外に本山があり、信者たちは、一九世紀なかばに考案された「鶏の足跡」と呼ばれる独特的の文字を使用している。

このように、それぞれの文字の起源が特定の宗教と関連しているだけに、これをめぐって宗教的な不和が表面化することもある。ある時デルタのボー・カレンの教会がカレン文字の講習会を開いたが、あれはキリスト教徒の文字だといって子供を参加させない仏教徒の親たちも多かったという。また、ヤンゴン在住のスゴー・カレンの仏教徒たちが、キリスト教スゴー・カレン文字の講師を探すにあたって、わざわざ遠くからこの文字ができる仏教徒の先生を呼んできたという話も聞いた。また、カ



「舟は全部止まれ」。キリスト教スゴー・カレン文字。タイーピルマ国境のカレン側検問所にて。



「イエスはわれらの望み」。キリスト教ボー・カレン文字。イラワディ・デルタの教会にて。



「民族間の団結を優先せよ」。仏教ボー・カレン文字(下段)。上段はビルマ文字。パンで見かけた政府のスローガン。

事実がある。カレン州に住む年輩のカレン人にはカレン語しかできないという人も多いのだが、ビルマ人の割合の多いデルタ地帯には、カレン語がまったく話せないカレン人も少なくない。

もちろん、言語の運用能力は環境に左右される。ある

デルタ出身の三〇歳代のボー・カレンの女性は、カレン

人しかいない村に育つたため、子供の頃ビルマ人の子供たちに罵られてもビルマ語が下手で言い返せず、悔しくて鏡に向かってビルマ語で罵る練習をしたそうである。このように、デルタでも育つた環境によってはカレン語のほうが得意になる人も少なくはない。しかし、デルタ地帯のカレン語が衰退傾向にあるのは事実である。

レン反政府武装勢力の中ではキリスト教スゴー・カレン文字が公式なものとして使用されているが、これに抵抗を示す仏教徒兵士も多い。

### ●カレン語の現在

ヤンゴン大学のカレン人の学生たちが一九七九年に出した雑誌には、スゴー・カレン語と東西のボー・カレン語の三種のカレン語で書かれた短編小説やエッセイが掲載されており、カレンの若者たちのカレン語に対するさまざまな思いが綴られている。

ある西部ボー・カレンの学生は、あと五〇年もすれば西部ボー・カレン語はなくなってしまうというアメリカ人宣教師の言を引用し、自分たちの言語の置かれた状況に対する危機感を訴える。また、あるスゴー・カレンの学生のエッセイには、カレン語ができなかつた叔父がカレン語のできる女性と結婚し、毎晩五語ずつ単語を教えてもらうことを繰り返して、ついにはカレン語を習得した様子が描かれ、自分たちの言葉を守る重要性を訴えかける。

学生たちがこのような文章を書く背景には、特に若い世代にカレン語が流暢に話せない者が増えているという

現在、学校教育では事実上少数民族語の教育をおこなうことが困難なため、デルタのみならず、比較的カレン語の優勢なカレン州においてさえも、自分たちの言語文化の衰退に対する恐れを抱いている人は多い。そのため、夏休みなどを利用したカレン語の読み書きの講習会が、

カレン州やデルタの各地で開かれている。例えばパアンでは、毎年四月の夏休みに若者たちが中心になって子供を対象とする合宿講習をおこない、仏教ボー・カレン文字の読み書きを教えている。

言語文化の維持活動は、僧院や教会の普段の活動の中でもおこなわれている。カレン州のボー・カレンの僧院では少年僧たちにカレン文字の読み書きを教えているところが多く、仏門に入ることでカレン文字に触れることができる。また、キリスト教徒の中には、カレン語でおこなう礼拝に参加することで読み書きができるようになる人も多い。

自分たちの言語文化を守ろうとするこうした動きは、カレン人だけに見られるのではない。例えばモン人は、シユエダゴン・パゴダの南門近くにあるモンの集会場でモン文字の読み書きを教える講習を不定期に開いている。

## ◎「カレン」の血を歌う

カレン独特の芸能を最も発達させたのは仏教徒の多い東部ボー・カレンたちである。ビルマでカレンの伝統芸能として紹介されるものほとんどが東部ボー・カレンの芸能であり、男女が叙情的な歌にのせて愛を語り合う歌垣や、カレン独特の漫才、舞踊などがある。

パアン郊外出身の歌手チョーライティンは、ボー・カ

レンの民謡を歌つてカレンの心を後世に伝えようとしている。彼は演劇一座を結成してカレン州を巡業しており、カレン語で演じられる自作の劇が多くカレン人の共感を呼んでいる。彼の名前は東部ボー・カレン語で「萌え出る文字」という意味であり、カレンの言語文化が発展するようにとの願いが込められている。

ボー・カレンの芸能のうち、特筆に値するのはドン・イエインと呼ばれる集団舞踊である。ドン・イエインというのはビルマ語の呼び名で、東部ボー・カレン語では「トゥン」と発音する。最高で男女一八人ずつ総勢三六人が、歌いながら強烈なリズムに合わせて飛び跳ね、複雑な隊形を作っていく。歌の旋律はどこか沖縄の歌謡を思い出させる。舞踊団は村ごとにあり、カレン州では

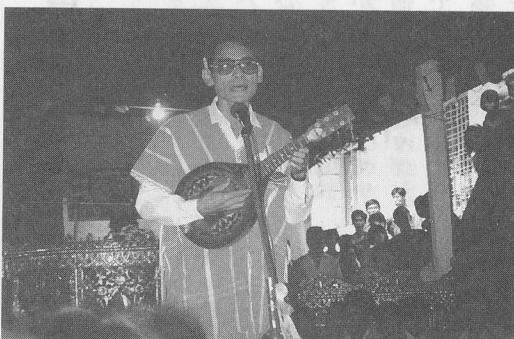
村々の代表を募って競技会が開かれる。普段は村の出来事を面白おかしく織り込んだ歌詞などが使われるが、カレン新年の競技会では、次のように民族の团结を呼びかける歌詞が使われることが多い。原詞はもちろん東部ボー・カレン語である。

ボー・カレンよ スゴー・カレンよ カレン新年が

やつてきた／みんな集まれ 兄弟たちよ 友人たちよ／先祖から伝わる祭りだ／团结しよう ボー・カレンよ スゴー・カレンよ／手を携えて一緒に行こう／困難など恐れない／どんな困難にも打ち克とう／わらの血はカレンの血なのだ（一九九五年一月のカレン新年のコンテストで使われた歌詞の一部）



夏休みの講習で、仏教ボー・カレン文字を習う子供たち。パアンにて。



ヤンゴンにあるカレン民族の僧院で、東部ボー・カレン語の歌を歌うチョーライティン。



ドン・イエインを踊る子供たち。パアン郊外にて。